



男鹿のロマンとナマハゲと

小 松 守

(秋田市大森山動物園 園長)

今冬は雪のない「雪の動物園」であった。老チンパンジー・ボンタが背に陽春を感じながら屋外展示場の鉄塔のてっぺんから隣で進む新サルの舎の工事を高みの見物だ。春の訪れが早い。

さて、今回はナマハゲのユネスコ無形文化遺産登録など、今何かと話題の多い男鹿に思いをめぐらせてみた。

昨年、久しぶりに急峻な階段を登り門前にある五社堂に参った。景色を眺めながら、遠い昔の人がそこに神の社を建てた気持ちがわかる気がした。眼下には、たおやかに延びる海岸線と平野が広がり、霊峰烏海山を含めた山々がその先に連なる。五社堂からは秋田のカタチがよく見て取れる。ナマハゲ伝説とも重なり、下界とは異なる空気感があった。

男鹿は自然や動物に関わり続けてきた私にとって様々な経験、思い出を与え続けてくれた特別な存在でもある。

雪の少ない西海岸に咲くフクジュソウと冬の渡り鳥観察はいつもワクワクさせてくれた。旅する鳥にとっても男鹿は大事な羽休めの場なのだ。また、孔雀の窟でのキクガシラコウモリとの出会いは刺激的だったし、そこで救護したキチキチと名付けた赤子の人工哺育では、小さな命の生きる力を体感できた。

高校時代の夏休み、地学部の気象観測合宿が真山の麓、安全寺小学校であったと記憶しているが、海とは違った男鹿の懐の深さを知った。合宿を終えての秋田への帰路、記憶では今の「お

が潮風街道」の舗装工事が始まっていたが、キスリングザックを背負い、なぜか門前までその道を歩いて帰ったのだ。無謀な冒険だったが、自分の脚で男鹿を踏破し、自然の力と向き合い大人びた気分になったことを思い出す。

小さい頃は両親に連れられ何度となく体験した男鹿の磯遊びや釣りは、私を生き物の世界、不思議さ面白さに誘ってくれていたのかもしれない。男鹿は多様な経験のできる魅力的なところだ。

男鹿の魅力、ロマンを考えてみた。地形学上の男鹿の成り立ち、奇岩を含めた海岸線の風景など、いわゆるジオパークとしての男鹿半島は格別だし、そこでの人々の暮らし、育まれた文化の一つユニークなナマハゲにはロマンがある。

太古の昔、本州北の日本海には佐渡島、粟島、飛島に続き、さらに男鹿の島もあった。その中であって男鹿の島は、本州との距離の近さに加え、東側方向、北に米代川、南に雄物川が流れ込み内陸の土砂が島近くまで運ばれ、やがて島は本州陸とつながった。偶然と必然でできた男鹿の存在にどこか自然の妙を感じてしまう。

男鹿は本山、真山、寒風山などの山で構成され、海岸線は切り立った崖が多いし、半島内部の山間は分散され狭い。男鹿の人々はそんな環境で自然と向き合い、いつの時代もけんめいに生きてきた。ナマハゲはそんな男鹿だから誕生した来訪神なのだろうか。

ナマハゲは、新しい年を迎えるにあたり、災

いから守り、あるいは怠けずに懸命に生きよと、諭し、戒めるために各家々にやってくる。男鹿の自然の成り立ち、そこでの人の暮らし、調和したナマハゲ文化に不思議な関係性があるように思えて来る。

ナマハゲ、言葉の由来は「ナモミ剥ぎ」とのことだ。「文化は辺縁に残る」と言われるが、日本各地に残る来訪神に共通する精神性であるようだ。人はいつの時代も、どこでも、災いを避けたいし、さらには生きる力を得たいものである。各地の来訪神にどこか、けんめいに生きるという、実に単純なことを大事な教え、戒めとして共通しているというか、通底しているようで実に興味深い。

来訪神の役目を地域の若者が担うしきたりも良くできたものだ。次世代への継承と同時に若者自身を先頭に立たせることで、自戒とともに地域への愛着育成にも大きな意味を持たせているのだろう。

ナマハゲが男鹿一円で脈々と受け継がれてきたのは、男鹿の人たちの自然と向き合うことで生じる意識、無くしてはならない大事な部分は似かよっていたからなのだろうか。男鹿は特異な一つの文化圏としてもいいように思える。

哲学者、和辻哲郎は著書「風土」の中で、人間の精神性は暮らす土地の地形、気候、自然環境など風土の影響を受け育まれてきたということ述べている。男鹿という独特の風土で暮らしてきた人たちの精神性など深い部分は私にはわからないが、ナマハゲという神を大事にし、その教えを受け、けんめいに生きようとしてきた人々だということは言えそうだ。

来訪神ナマハゲは、人々が大事に受け継いできたけんめいに生きる力が萎えてしまわないよ

うに、毎年欠かさず神事を続けている。生きる力をつけるため来訪神であるナマハゲもけんめいなのだろう。ナマハゲと人々のつながりはロマンそのものだ。

ナマハゲは男鹿全体に通底する精神性だが、興味深いのは、神の姿や仮面・仮装、立ち居振る舞いなどが地域によって少しずつトーンが異なっている点である。男鹿の環境は海沿い、山間で随分と異なるから、感性も自ずと異なるのだろう。ナマハゲの仮面が多様である点は実に面白い。真山神社の麓、「なまはげ館」では90近い仮面を見ることができ、それは男鹿に暮らす人々の地域ごとの感性、神への思いを見るようで面白く驚かされる。人の暮らしが違えば感性も異なり、神の姿も異なるのだろう。

ただ、仮面の下に存在する神を思う精神性には差はない。外見は微妙に異なるがナマハゲの本質、男鹿という地域全体で育まれたナマハゲの精神、文化が変わるところはない。

日本人はあらゆるものに神を宿らせ、そしてその神は社の奥におわす目に見えぬ存在にして崇めてきた。しかし、来訪神ナマハゲは、必要な時に人々の前に出てきて、災いを払い、しっかり生きよと戒め諭してくれる極めて稀な神である。機動力があり、より身近で人の気持ちに添った神様なのかもしれない。人間の生き方、その規律が崩れ始めている現代社会、きちんと叱り、戒めてくれる来訪神ナマハゲが必要な時代のようにも思えてくる。

来訪神ナマハゲの棲むロマンあふれる男鹿で今、ナマハゲを題材にした映画化も進んでいると聞く。「ちゃんと生きよ」と諭し戒めることのできる来訪神ナマハゲの存在がより強く発信できることを大いに期待したいものだ。